観光客(郵便的マルチチュード)としての災害ボランティア

災害ボランティア論の更新の試み

○渥美公秀

(大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード: 観光客、郵便的マルチチュード、災害ボランティア

Disaster Volunteers as Tourists (Postal Multitudes)

Tomohide ATSUMI

(Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ.)

Key Words: Tourist, Postal Multitude, Disaster Volunteer

災害ボランティアを理論的に考究するために柄谷(2010)の『世界史の構造』を参照し、災害ボランティアが交換様式Dの到来を招く可能性を示唆した(渥美, 2016)。本稿では、観光客の哲学(東, 2017)を接続し、災害ボランティアを観光客(郵便的マルチチュード)として捉えて、災害ボランティア論の更新を図る。

1. 交換様式Dを招来しう災害ボランティア

柄谷は、社会構成体の歴史を、A, B, C, Dという4つの交換様式のダイナミックスとして描く。まず、交換様式Aの前段として、定住しない遊動的な狩猟採取社会の交換様式Uの存在を認め、その否定によって交換様式Aが生まれる。交換様式Aは、贈与と返礼を基本とする相互扶助的な交換様式(共同体)である。交換様式Bは、収奪と再分配を基本とする交換様式(国家)が対応する。交換様式Cは、商品交換を基本とする現代社会の交換様式である。交換様式Dは、交換様式A, B, Cを無化する様式として、強迫的に「いまだなかったもの」として未来から到来するようにして、交換様式Uの高次元での回帰として立ち現れる。渥美(2016)では、災害ボランティアは、不特定の被災者に対する、見返りを期待しない片務的な贈与であり、災害ボランティアが、閉塞感に満ちた現在の資本=ネーション=ステートを超えていく契機となり、交換様式Uが高次元に回帰した交換様式Dの主体とした。

2. 観光客の哲学

東(2017)は、観光客の哲学を展開する。観光客は、観光地に来て、住民が期待した楽しみ方とはまったく別のかたちで楽しみ、そして、一方的に満足して帰る人々を指している。東は、まず、観光客の背景に、現代社会のグローバリズム・ナショナリズム二層構造を捉える。そして、ネグリとハート(2003)のマルチチュード概念に戦略論・運動論が欠如していることを批判し、デリダの誤配の概念に立ち戻って、郵便的マルチチュードを提唱する。ここで、東は、ネットワーク理論を参照し、郵便的マルチチュード(観光客)は、スモールワールドをスモールワールドたらしめた「つなぎかえ」(誤配)の操作を、スケールフリーの秩序に回収される手前で保持し続ける抵抗の実践者と位置づける。郵便的マルチチュードの戦略とは、誤配を演じ直す「再誤配の戦略」である。出会うはずのない人に出会い、行くはずのないところに行き、考えるはずのないことを考え、優先的選択を誤配へと差し戻す。さらに、郵便的マルチチュードの主体のあり方について「カラマーゾフの兄弟」の続編(亀山, 2007)に言及し、テロ組織の指導者にもならず、父のように守りもしない何もしない「不能の父」として描かれるアリョーシャこそが観光客(郵便的マルチチュード)の主体だとする。

3. 郵便的マルチチュードとしての災害ボランティア

災害ボランティアの現場では、遊動性を重視する災害ボランティアは、「被災地に駆けつけ」「支援が集中していないところにこそ支援に入り」「寄り添う」といった姿勢を堅持す

る。遊動性を堅持する災害ボランティアに郵便的マルチチュードの姿を重ねることができる。遊動性を堅持する災害ボランティアは、「被災地に駆けつける」。物見遊山に出かけていく郵便的マルチチュードと同様、被災者への想いなどの言葉とともにふと出かける。遊動性を堅持する災害ボランティアは、災害ボランティアセンター(災害ボラセン)によるコーディネートにとらわれるず、誰彼となく支援を展開する。物見遊山に出かけた郵便的マルチチュードが、連帯なしに誰彼となくコミュニケーションを図るのと同様である。災害ボランティアは、「支援の集中しないところ」に赴く。そこでは、支援の集中を回避することで、スケールフリー性が回避される。遊動性を堅持した災害ボランティアが「寄り添う」というとき、実は、何も具体的な事柄は特定されない。不能の父として描かれた郵便的マルチチュードの主体である。

4. 災害ボランティア論の更新

災害ボランティア論としては、少なくとも以下の3点について更新の契機を得る。まず第1に、秩序化のドライブと遊動化のドライブの拮抗は、ナショナリズムとグローバリズムの二層構造として捉え直すことができる。そして、災害ボランティアは両者を橋渡しする存在である。各ドライブの構成要素の精緻化とともに、秩序化のドライブを駆動させる社会的な背景(リスク管理社会)や遊動化のドライブを受容する背景(歓待の哲学、即興の組織論)へと検討を重ねたい。

第2に、郵便的マルチチュードとしての災害ボランティアという立場からは、災害ボランティアの運動論的戦略一誤配の再演ーを得ることができる。実践的には、災害ボラセンでコーディネートを受けても常に逃走し、目の前の被災者に向き合うことが、現在進行中の秩序化への強力な抵抗になる。

最後に、郵便的マルチチュードとしての災害ボランティアは、災害ボランティア活動の継承に関する示唆も得られる。被災者に寄り添うことが最重要であるとの信念を次の災害時・次世代に継承する方略は未だ確定しない。不能の父として、次世代の災害ボランティアのただ傍にいと考えることから遊動化が生まれる希望はそこに見いだせるだろう。

5. おわりに

これまでの議論では、災害ボランティアが交換様式Dを招来する可能性が示唆されていたにすぎなかった。本稿で、郵便的マルチチュードの概念と、誤配の再演といった戦略、また、不能の父という主体の姿を得たことで、災害ボランティア論がわずかながらではあるが更新された。秩序化のドライブと遊動化のドライブとの関係のダイナミックス、誤配の再演戦略の深化、不能の父の姿勢など、今後、実践事例とともに整理していくことで、災害ボランティア論も豊かになり、交換様式Dもよりくつきりと姿を現すのではないかと考えている。

主な引用文献

東浩紀(2017)「ゲンロン0 観光客の哲学」genron